

発行責任者
公益社団法人隊友会 神奈川県隊友会
湘南支部長 中尾 剛久
茅ヶ崎市赤羽根 2661 - 26
Tel : 090-4897-4074

隊友

湘南支部ニュース

国民と自衛隊との架け橋！

「花見の危機」

湘南支部長 中尾 剛久

今年も桜の季節が到来しました。気象庁の長期予報によれば、春から夏にかけても高温傾向が続くようです。また去年のような炎暑がやってくるのかと思うと憂鬱な気分になります。二月二六日に発表された桜の開花予想では、今年も例年より早くなっており、東京では三月十六日開花、三月二四日満開の予想となっています。三月号の湘南支部ニュースが発行される三月二三日には当然のように桜は開花し、もしかしたら満開も近い状態なのかもしれません。今年に限らず、最近は四季の二季化、日本列島全体の亜熱帯化が相当なスピードで進んでいるような気がしてなりません。一体どこまで桜（一般的にはソメイヨシノということになります。）の開花が早まるのか？二月中の開花もあり得るのか？などと心配になってきたりします。

ところが開花が早まるだけではない異変も起きています。南日本（鹿児島など）では、桜の開花が遅れる、花の数が少ない、一斉に咲かない、満開にならないといった現象が起きているとのことです。これには桜の開花メカニズムが深く関わっていることが研究により明らかになっています。桜の開花の仕組みは次のようなものなのです。
①夏の時期に花芽（かが）ができる。
②秋から冬にかけて花芽は乾燥や凍結から身を守るため成長を止め、寒い冬に耐えるモード（休眠・しゅうみん）に入る。
③休眠を解除するためには冬の間の一定量の低温が必要。
④休眠が解除されると春の暖かさを感じて成長モードにスイッチが入り、つぼみが成長（花芽内部の活動が一気に加速）し開花へと向かう。

つまり、冬に一定の寒い時期が続く、春が暖かいと開花の時期が早まります。一方、冬が暖かすぎると休眠が解除されにくくなり、逆に開花が遅れるという現象が生じます。実際、一昨年の暖冬では八丈島と青森の開花が同日になりました。このまよいけば、冬の寒さが確保される東北以北は益々桜の開花が早くなり、関東以西は開花の遅れや開花数の減少などが起こる可能性が高くなります。今は南から北に進んでいる桜前線も、いずれ北から南に進む逆転現象も起こり得ると言えます。もっと進むと、長期的（二十二世紀初頭頃）には、南日本ではソメイヨシノが咲かなくなる地域も出てくるという研究もあります。

現在も沖縄や奄美など本土より南の地方では桜と言えばソメイヨシノではなく寒緋桜や八重桜になりますが、花の質が違うので趣も異なっています。寒緋桜の花は大きめの花が下を向いて咲き、散るときは花首ごと落ちます。落ちた花首が桜の木の周囲を絨毯のように埋め尽くし、それはそれで美しいとも思いますが、ソメイヨシノのように花びらがはらはらと散る桜吹雪や、水面を桜の花びらが埋め尽くす花筏、あるいは春の宵に桜吹雪の花びらを酒杯に浮かべて桜を愛でるなどという風情を楽しむことはできません。やはり三月末から四月初めにかけての卒業や進学、就職といった節目と、はらはらと花びらを散らす満開の桜の木の取り合わせのイメージはこの時期の必須アイテムであり、日本人の琴線に触れる光景であることは論を俟ちません。花見とともに何としても後世に残していきたい日本独自の文化の一つだと思います。ソメイヨシノについてはもう一つ、

昨今腐朽や倒木の恐れを理由に伐採や大規模剪定が進められているという話も聞きますが、これはソメイヨシノの寿命が短いわけではなく、排気ガスなどによる大気汚染の影響や、根元が人に踏まれて傷む（踏圧害）などの悪い生育環境に起因するダメージが大きく、結果として樹勢が衰えてしまっているのが実情のようです。地球温暖化を含めた気候変動に対しては、自然の動きが相手なので我々ではどうしようもない面があります。こちらは花見文化を守るためにも早急な対策が必要であると思います。高齢化した桜の木の適切な管理と生育環境の整備、気候に応じた桜の新品種の開発と計画的な植樹などの長期的視点での桜更新計画などにより、日本の伝統的な文化である「春の花見」を後世に継承していきたいものだと思います。



靖国神社標準木

それはそれとして、今年も花見ができる幸せを噛みしめながら、春の酒に酔いたいと思います。

「パプアニューギニアのこどもたち展」レポート 最終回

支部理事役 荻原 洋聡

4 来訪者の反応（会場での私の説明に対する反応）

昨年（R7）7月～11月の開催期間中（土・日のみOPEN）、私自身の現地での対応は月に1度が精いっぱいでした。一方、来訪者名簿を見たところ、1100名超の来訪があったことに驚きました。ですから、これらの絵

画がどのような経緯でこの会場に在るか？という原点から、来訪者と「対話」をしながら、想うところを伝えられたのは、そのうちの僅かな方々でしかなかったのです。限られた時間ではありましたが、PNG現地での活動状況、実体験を説明しました。皆さんも展示品を前にして、適切な説明が在ると無いとでは、その展示品の由来、すなわち、「物語り」を十分に理解し味わうことが難しい経験があると思います。その点、私自身が説明する手段・機能を備えられなかったことが、今回展示での反省点となりました。

私が最も伝えたかったことは、何か？それは、現世界で最後の秘境とも謂われるPNGの派遣先の村の人々が、素朴な暮らしながらも、実に、心豊かに幸せに生き生きと生きている姿でした。恵まれ、いや、恵まれ過ぎた日本の便利極まる環境にあっても、争いが絶えず、不満が尽きず、心の中がもやもやとざわつく日々を生きる自分自身がいます。その迷える自分自身に対して、PNGの人々から突き付けられ続けている『問いかけ』であり、『気づき』です。『僕たち、私たちは、何か大切なものを忘れているのではありませんか？人間にとって、本当の幸せとは何ですか？』

その原点とは、最初に滞在したブレインディ村の子ども君たちの姿にありました。我々の道案内や、荷物運びを喜々として手伝ってくれました。お礼の意味を兼ねて、2日目の朝、滞在ホテルの朝食時に出たジュースパックを3個ほどを自分では飲まずに、作業休憩時に子ども君たちの頭（かしら）であるエンディ君に渡しました。皆さん、そのあと、彼はどうしたと思いますか？

まず、子ども君たちは、私が彼にジ

ユースを渡す様子を見て、自然とエンディ君の周りに集まってきました。彼は周りを見渡すと、一番幼い子どもたちに行きました。そして、まず、その子に飲ませたのです！それから、残りを等しく廻し飲んだのです。一人一人の口一杯を満たす量はありません。それでも、誰一人、独り占めすることもなく、等しく分け合うこと、最も弱い者を先に助け合うことが当たり前となっている無意識・自然な姿を観て、私は、とても驚き、心撃たれました。

それは、一昨年のブーゲンビル島・タロキナのピグ村の子ども君たちも同様でした。特に、この村には「電気」自体がありません。ということは、熱帯雨林気候の中で、食べ物を保管する冷蔵庫も無いということです。8割以上の国民が自給自足の生活といわれる環境では、自然の中にある物を必要なだけ自然から頂いて多くを求めないという「吾唯足知（吾、ただ、足るを知る）」を体現している生き方そのものだと思いましたが、国連がSDGsを提唱してはいますが、それを我々は本当の意味で達成できるのでしょうか？唯一達成している人々があるとしたら、パプアニューギニアの人々ではないか？と感じるのは私一人ではないと思います。しかも、それは、『物』の次元だけではなく、『心の時空間』の双方に於いても、なのです。

5 今後の展望

ありがたいことに、今回の特別展示は常設展示へ移行する機会をいただくことになりました。昨年の展示は、私がPNGから日本へと運び・伝えるだけの一方通行でした。それだけでは、何か物足りない想いを抱いていたのです。日本とPNGの次世代を担うそれぞれ（各国）の子ども君たちを、絵画を通して交流・繋ぐことはできないだろうか？ということ。私自身が現地に行くことは困難でも、遺骨収集現地調査は続いています。それならば、派遣される隊員に、ここ久慈の子ども君たちに描いてもらおうと絵を現地に届けても

らい、さらに、現地の子ども君たちが描く絵を、また日本に届けてもらおうなら、日本とPNG間の双方方向のコミュニケーション・チャネルが構築できるのではないだろうか？と考えたのです。

そこで、開催期間中に「あーとびる麦生（むぎよう）」を訪れた子ども君や、学童保育の子ども君たちに絵を描いてもらいました。そして、令和7年度 第1次ビスマーク諸島戦没者遺骨収集現地調査（R8・2・18〜3・12）のチームに、タロキナとブインの子ども君たちに宛て、久慈の子ども君たちの絵に、新たなお絵描き道具を添えて託しました。今次の派遣コースは、一昨年、私が派遣されたブーゲンビル島のタロキナ（ピグ村）や、ブインの同じコースです。ですから、もし、現地からの新たな作品が再び久慈の「あーとびる麦生」に届けられたら、その『交流の橋』が繋がることになるはず！とスタッフ一同心待ちにしているところです。



パプアニューギニア・ウエワクブレンディ村の子ども君たち

それにつけても、今年も世界各地で新たな戦端が開かれ、何故、尽きることが無いのか？そのことがどのような結末になるのか？それは私自身がPNGのジャングルの中から戦後80年目にしようやく収容させていた戦没者の御遺骨の姿・現実に全てが示されています。果てしない無力感を覚えます。しかし、数多くの戦没者の遺書の中に観る、親兄弟・わが子たちへの想いは世界共通の想いであり願いだと感じます。それを果たせないまま散華された英霊の無念を幾許かでも寧ろ無理なくできるうちに、さりげなく、ひとつひとつ、身を以てやってみようと思っ

PNGの子ども君たちの生きざまが、この尽きない矛盾からの脱却の鍵であり光明だと思います。そして、今、私の頭・心の中をぐるぐる回っている2つの言葉に、その解決の端緒があるような気がしています。それを以て、パプアニューギニアからのお元気でお願いします。皆様、どうか

「熊」

支部理事役 鼓 達也

2025年11月に初の熊駆除に関わる自衛隊の派遣が実施された（自衛隊法100条）。自衛隊では演習場で熊と遭遇することがあるが駆除することはない。野生動物の駆除は県知事の狩猟許可が必要であり銃所持許可証だけでは駆除はできない。ハンターの高齢化が進んで人員不足であることも課題だ。その中で熊の駆除経験がある人はほんの一握りである。自衛官は野生動物に対する訓練はなく射撃についても通常は静止した標的を用いる。2015年に千葉県松戸市で通行人らに襲いかかった紀州犬に、警察官3人が住宅街で拳銃を計13発撃ち射殺という事件が起きた（6発命中していた）。動的への射撃は容易ではないことが分かる。

自衛隊や警察はフルメタルジャケット弾で貫通させることを目的としているが、猟で用いられるのはホローポイント弾（ダムダム弾であり対人用としては非人道的な兵器として1899年のハーグ平和会議で軍事使用が禁止）という標的に衝突すると膨張し、弾が貫通せず体内にとどまることで運動エネルギーをすべて対象に与えることでダメージが大きい。前述した千葉県の事件でも貫通し有効なダメージを与えられていなかった可能性がある。散弾であっても適当に撃つて当たるものでもない。ハンター以外では野生動物のような動的に対する射撃経験がないのが実情で動物の習性も知る

必要があり容易にスキル習得できない。筆者もクレー射撃で散弾銃で動的に安定して当てられるようになるまで、年間に2000発ほど射撃して見だし感覚や立位での射撃姿勢を身に着けた（私にセンスがなく他の方はもつと早く習得できるかもしれない）。

日本では銃所持への敷居が高く、人材も不足の上に駆除への報酬も低く（秋田県では熊1頭一万円の報酬であり、スラッグ弾は1発数百円）であり、銃整備などのラニングコストを考えると利益は出ないどころかマイナス、行政から依頼されて警察官立ち合いで駆除したのに法的に禁じられている「弾の届く恐れのある建物に向けた発砲」と判断され銃所持許可が失効処分という、何のメリットもない状況が生じているのも課題だろう。

一番の問題は里山、空き家、柿の木などの整備だろう。熊と人間の領土争いを少しでも減らすために住み分け共存していくしかない。野生動物も死に物狂いで食べ物を求めている。自衛隊経験者がガバメントハンターになってみたり銃所持許可を得て自然や野生動物と向き合う機会にしてみてもどうだろうか。

- 「支部の予定」
・04/04（土） 第1回支部理事会
・04/17（金） 4月号隊友紙発送

編集後記

イスラエルとアメリカの共同攻撃によりイランの最高指導者ハメネイ師が死亡したと報じられた。今後とも各種ジャンルに亘る、ご寄稿のご協力を宜しくお願い致します。